

第10回企画展「少女が残した登戸研究所の記録
-陸軍登戸出張所開設80年-」記録
「私の街から戦争がみえた」-登戸研究所に勤務した
少女との出会い-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学平和教育登戸研究所資料館 公開日: 2020-11-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 賢二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21298

第10回企画展「少女が残した登戸研究所の記録 ―陸軍登戸出張所開設80年―」記録 記念講演会「少女が残した登戸研究所の記録・『雑書綴』発見秘話」

「私の街から戦争がみえた」 ―登戸研究所に勤務した少女との出会い―

渡辺 賢二

明治大学平和教育登戸研究所資料館展示専門委員

開会の辞 明治大学平和教育登戸研究所資料館長 山田 朗

今日は大変寒く雨の降る中、明治大学生田キャンパスへお越しいただきましてどうもありがとうございます。

企画展も第10回を迎えました。2010（平成22）年にこの平和教育登戸研究所資料館が開館して以来、年1回、11月から翌年3月まで企画展を開催しています。〔1944（昭和19）年から1945（昭和20）年の登戸研究所では〕この期間はちょうど風船爆弾の実施期間でした。登戸研究所資料館では、それと同じ期間で企画展を必ず開催し、常設展では説明しきれない内容を展示しております。今年はこの登戸研究所に対する調査活動が本格的にはじまってから30年という節目です。

1989（平成元）年、この登戸研究所研究にとって、非常に大きな出来事がありました。それはいくつかあるのですが、ひとつ挙げられるのが、今日、渡辺先生にお話いただく、小林（旧姓 関）コトさんが綴っていたこの資料〔『雑書綴』〕が明るみに出て30年ということです。

実際この『雑書綴』に記されていることは、登戸研究所の内容を知る上で非常に重要なものです。なんといっても、登戸研究所についての公文書類というのは、徹底的に敗戦時に処分されており、公文書と名付けられるものは全くといっていいほど残っていません。本来であれば公文書として残されるべきものがたまたま個人が持っていて、戦後出てきたというものはありましたが、現在、公的機関に色々な問い合わせをしても、登戸研究所関係で所蔵されている資料というのは全くない、と言っていいほどです。なぜなら、これは敗戦時に、非常に厳密に資料が廃棄処分されたからです。1945（昭和20）年8月15日、玉音放送の前に、当時の陸軍省から通達が出て、もうすでにポツダム宣言を受諾していたため、戦犯裁判などがあるということが分かっていたために、「敵に証拠を得ることを不利とする研究」と限定して、証拠を早く消しなさい、という命令が出ております。これは一般国民が終戦を知る前にそのような通

達が行われて、確実に実行されました。

その通達の、おそらく処分の優先度が一番高いものとして、「ふ号及び登戸関係」と書いてあります。ですからそれほど登戸研究所における研究というのは秘密度が高かった。二番目に出てくるのが「関東軍及び七三一」です。本当に当時の最高国家機密といえるもの、それが処分をされてしまったということです。この命令はほぼ確実に実行されました。ですから、その公文書類は一切残っておりません。

それから戦後も、長い間、関係者は口を閉ざしていました。それはやはり、話していけないという強い思いがあったわけですね。ところがその大きな転機になるのが、戦後40年を超えてから、登戸研究所に働いていた人達が、ぽつぽつと集うようになったことです。それだけではなく、1987（昭和62）年頃を契機として、この川崎市で、登戸研究所に関する調査活動が始まります。その中心になったのが、本日お話しいただく渡辺賢二先生です。先生は、1989（平成元）年に、先ほどの、関コトさんの『雑書綴』を明らかにし、〔元登戸研究所第二科第一班長の〕伴繁雄さんへのインタビューをされました。この二つは登戸研究所の知られざる部分を明るみに出すという、決定的に重要な資料となりました。

つまり、昭和が終わったという時期に、ようやく登戸研究所の実態が少し知られるようになりました。実は、それまでに部分的にはそうした動きがありました。例えば、1984（昭和59）年に、登戸研究所の第三科長であった山本憲蔵さんが偽札作戦についての本（『陸軍贋札作戦』）を書いています。あるいは、ジャーナリストの方で、登戸研究所についての聞き取り調査をされた方もいます。ですから、登戸研究所の知られざる実態が、部分的には分かってきていたのですが、1989（平成元）年は登戸研究所の全体像というのが見えてきたというまさに画期的な年なのです。

それでは、まさにそのきっかけになりました、渡辺先生たちの調査の実態、それからこの『雑書綴』に何が記されていたのかということを中心に、渡辺賢二先生にご講演をいただきます。

講演 「私の街から戦争がみえた」 —登戸研究所に勤務した少女との出会い—

講師 渡辺 賢二（明治大学平和教育登戸研究所資料館展示専門委員）

はじめに

こんにちは。お寒く天気の悪い中、大勢の方にお集まりいただきありがとうございます。

今、山田先生からご紹介していただいたとおり、この登戸研究所資料館ができて来年（2020年）の3月で10年になります。その資料館というのは、市民の力、それから何よりも登戸研究所に勤めた人の証言からわかってきたという、なんとも不思議な成り立ちです。その経過について、お話したいと思います。

講演の中心は今回の企画展ポスターにもあるように「ある少女の記録」です。少女は15歳でここに勤めた人で、その人が残した記録から登戸研究所の実態が分かってきました。大変不思議なことです。その少女は（旧姓）関コトさんといまして、のち結婚されて小林コトさんとなります。その当時は小林コトさんから私は分厚い史料を預かりました。どうしてそんなことがあったのか、そしてそれから何が分かってきたのか、そしてその後どうなるのか、そういったことを今日はお話させていただきます。

本日は、小林コトさんのご長男の方をはじめ、ご家族の皆様がわざわざおいでいただいています。ご紹介します。長男さんとお孫さんです。そのほかご親戚の皆様など大勢の方がお見えです。コトさんのご家族のご協力がなければ、登戸研究所のことは全然わかりませんでした。

1. 川崎市中原平和教育学級のはじまり

最初は本当に偶然なことでした。私が当時勤めていた職場が川崎の武蔵小杉にある法政第二高校でした。そこで地域のことを調べてみようということで、いろいろなことをやっていました。1985（昭和60）年からは、川崎市では平和教育学級という活動が開始されました。これは川崎市教育委員会が主催し、市民が企画員になって自分たちが調べたいことを調べるというものでした。その取り組みも30周年を迎えていて、「川崎市平和人権学習30年の歩み」というものとしてまとめられています。この取り組みが一番の原点です。そして、1986（昭和61）年から私が勤めていた法政第二高校のある武蔵小杉周辺は川崎市中原区といい、その中原区の

平和教育学級が始まりました。そこで生徒も連れて参加して、企画委員になって、調べ出しました。本当に何にもない所から始まったわけです。

2. 登戸研究所が一つのテーマに選ばれた

そして1987（昭和62）年は、「川崎と戦争」というテーマでやりはじめました。その時ある新聞記者から話を聞きました。川崎市の北部、この明治大学生田キャンパス周辺で、戦争中稲が実らなかったという事件があって、しかし、だれも訴えることができなかったという噂話があり、今、明治大学農学部がある場所が当時なにかの研究に使われていて、それが原因なのではないか—このような話を聞き、それは面白いということになり、明治大学の生田キャンパスの調査に入りました。そして、市民・高校生・教師も含めて、フィールドワークをしました。当然、中原市民館〔註・川崎市の社会教育施設〕の職員が企画していく中での取り組みでした。

これがその時の配布資料です。中原平和教育学級という取り組みで、継続して活動していることが分かります。「川崎登戸研究所を見学する」という活動も書いてあります。この時は何にも、一切はわかっていません。登戸研究所というところである、ということだけがわかっていました。



図1 中原平和教育学級での配布資料
（渡辺賢二氏所蔵）

3. 現地調査の開始

はじめに当時の明治大学農学部に行きました。農学部は古い建物を使っていました。そこには巨大な動物慰霊碑が遺っていました。どんな動物を殺したのだろうかということ、そして、これは大変とんでもない研究所みたいだけれども、どんな研究所であるのか、今の防衛省、防衛庁戦史資料室（当時）へ行ってみようということで、みんなで出かけました。しかし、何にも史料が存在しない領域でした。調査はそのような状況から始めました。

これが、その時出会った動物慰霊碑です。巨大で、3メートルくらいの高さがあります。表面に篠田鐐という名前があって、そして後ろには「陸軍登戸研究所建之 昭和十八年三月」。これだけしかわかりません。どんな動物を殺したのだろう、私たちの中では深まる内容はそのような話しかありませんでした。しかしこれが遺っていたというのが幸いでした。なぜ遺って



図2 動物慰霊碑
(撮影年不詳、渡辺賢二氏提供)

いたかという、偶然にもこの土地を明治大学が買い、農学部が使いました。農学部は登戸研究所が何であるかとは全然知りませんでしたが、動物を実験しますから、「おお、動物慰霊碑がある、廃物利用して、ここで動物慰霊祭をやる」ということで遺したわけです。

そして後でも触れる、弥心^{やこころ}神社もありました。この神社も残しておこうとなりました。大学に神社があるなんてそんなにないですね、皇学館大学とか國學院大學はありますけども、普通の大学で神社があるなんてほとんど考えられない。政教分離の規定に反するというで国公立大学だったら壊します。ゆえに、ここも明治大学の法学部や文学部が来たら壊してしまったと思われます。農学部が来たからここに遺っている。神社も遺っている。ここでは動物慰霊祭をやり、神社では収穫感謝祭をやる、などということ、遺ってきた。これが今日では、大変な戦争遺跡だとわかって、今では川崎市の地域文化財として指定されています。

4. 井上さんとの出会い

明治大学生田キャンパスに一度行っただけでは何もわかりませんでした。それから何を調べようかと考えました。当時、そこには登戸研究所が建てた建物がたくさん遺っていました。登戸研究所は、大変大きな施設で、明治大学の中だけでも5万坪、それから谷を越えて川崎市立生田中学校の方を含めるとものすごく広いところでした。しかし、何の史料もない。登戸研究所にゆかりがある人が訪れないかと、何回行っても同じ人しか見かけません。これではどうにもならないなと思ったら、ある新聞記者が、それでは、何回か登戸研究所の遺跡の見学会をやれば、ここに勤めた人が来るかもしれない、そのようなことを言うので、何回か見学会をやり続けました。

5回目くらいの時でした。後ろからついてくる方がいました。その方がこの井上三郎さん



図3 中原平和学級での活動の様子
(山崎信喜氏撮影、渡辺賢二氏提供)

という方でした。「登戸駅の近くで印刷屋をやっている井上です」「ここへ勤めたんですか」「そうです」。その人と出会わなかったら、小林コトさんとも出会いませんでした。

写真左から三番目の方が井上さんです。四番目の帽子の方が和田一夫さんという方です。この方たちと出会って、さらに小林コトさんとも出会うということになります。私もこんな若い時もありました。恐縮です。この写真を撮っ

たのは、川崎市中原平和教育学級を一緒にやっていた山崎信喜さんです。山崎さんが市の職員として私たちと一緒にやらなかったら、この『雑書綴』までもつながりませんでした。

登戸研究所の資料というのは、こうした市民の、本当に普通の活動の中から色々なことが見えてくる。とても不思議なことが連続して起こって、それがエネルギーとなって、今日の資料館につながる、という経緯を次にお話します。

5. 井上さんが語ったこと

井上さんが語ったことは非常に不思議な事でした。動物慰霊碑なんてはじめて見たということです。「当時、登戸研究所第四科というところに勤めていたから、このような、ほかの科の場所には近寄れなかった。そして、登戸研究所の解散の日に、秘密を墓場まで持って行こうと言って解散したので、誰も話す必要ないし、ここに勤めた人、顔は知っているけれど挨拶もしないまま、40年間このあたりに住んでいた。しかし、40年過ぎたころから、だんだんお互いに挨拶をするようになった。それは、青春を失っていたという思いがだんだん苦しくなって、だから、それを取り戻すかのように「あなたもあそこに勤めていましたね」などと、ちょっとずつ挨拶をするようになった。それから、登戸研究所の「登研会〔註・元登戸研究所勤務員有志の会〕」を作ろうというので、名簿を作っている」ということを井上さんが語ってくれました。そして、登戸研究所の話をしてくれますかと言ったら、井上さんはもう絶対話をしないよ、ということを言われました。それで行き詰まりました。

6. アンケートをとる

しかし、勤務した人たちに何とか連絡したいと思いました。中原平和学級に参加していた高校生のアイデアで、アンケートをその人たちに出示したかどうか、という提案がありました。そこで、井上さんに、「登研会」の名簿を提供してくれますか、と聞きました。まあいいよ、ただアンケートはどこから出すんだ、みんなが信用しないところから出示したらだめだ、と言われました。先ほどの山崎さんたちも頑張ってくれて、川崎市教育委員会の名前で出そう、と決まりました。今だと個人情報保護法で多分だめかもしれませんが、当時は教育委員会からすぐに許可が出ました。それで井上さんが提供してくれた名簿をもとに「川崎市教育委員会」名でアンケートを出しました。そのアンケートの回答が、今、資料館にあると思います。結構詳しいアンケートを、名簿に名前のある99名に出示したのです。その中で27名の方から返事をいた

だきました。大勢で驚きました。その中の、先ほどの和田さんなど数名の人から、話を聞く事ができるようになったわけです。

7. 登戸研究所に入所した若者たち

そして、アンケートから、登戸研究所全体で、千人ぐらいの人が勤めていたことがわかりました。将校は百数十名、ほかには色々な専門学校〔註・戦後、大学の工学部などとして改編された学校〕を出た人がいたり、あとは本当に15歳で高等小学校を出たばかりの少年少女がたくさんいた、などというように分かりました。入所するときは、憲兵が調査をして、「どこに行っているのか、仕事内容は話さない」という条件で各高等小学校の許可を得て入った、そういう人たちが数百名いる、ということもだんだんわかってきました。そして、その人たちは、所内に入ったら自分の部署以外は移動もしない、ということでした。しかし将校と違う所は、自分が行っていた場所については、詳細に、この場所で自分は働いていた、と皆さんが語ってくれるわけです。将校はどこで働いていたのかわからない人もいましたが、高等小学校を出て勤めた人から、ここで何をしたかというのが克明にわかってきました。元勤務員の証言を点とすると、その点が集まって次第に面になり、そして立体化する。こういう具合にしないでわかってくるようになりました。

8. ある少女との出会い

その時にアンケートで、15歳でここに勤めたという女性が、自分は登戸研究所の史料を持っている、と回答していました。どこに行っても無かった史料を15歳でここに勤めた少女が持っているというのは極めて不思議な事でした。ところが、史料を見てびっくりしました。900枚を超す和文タイプの記録集で、その表紙には達筆な字で『雑書綴』と書かれていました。これは綴を保管していた少女であったご本人が書いたものです。関コトさんというのは旧姓ですから、「関」と書いています。そして、1941（昭和16）年に勤めて以降、1944（昭和19）年まで綴り続けた文書でした。

9. ある少女の仕事は？

この少女は、最初は第二科の雇員として入所しました。仕事は、お手伝いさんのような、お茶汲みさんとして勤めましたが、とてもやる気があり、真面目で、能力もある、ということで、この第二科でタイピストになることを勧められ、タイピストになる道を選びました。

タイピストというのは、今のパソコンよりも、全然難しいです。特に和文タイプは、漢字をカタカタと選んで打たなければならないし、平仮名があります。それから登戸研究所は英語の文章も書かなければならなかったのもう、本当に大変な仕事です。タイピストになるために、コトさんは午後四時に勤務が終わると渋谷のタイプの学校に通って、毎日毎日練習して、家に帰っても練習したりしながら、そして職場ではまた打ち続ける。そのように、登戸研究所の第二科の文章を打ち込んでいく仕事をするようになりました。この『雑書綴』は和文タイプの副本です。「正」と「副」の二枚打つのです。そのうち「正」は全部提出します。「副」の中の一部だけは自分で綴じすることを許されました。これを毎日綴じ続けたのが『雑書綴』です。それで「極秘」という判が押された書類は、近くで職員がじっと見ている、失敗しても成功しても全部提出する、あるいは焼却する、という措置を取られていました。したがって、『雑書綴』のタイプ文書は、本当に貴重な物ですが、残ることが想定されていないのになぜ残ったのか、というのが大変不思議なことでした。ですから、関コトさんにお会いするまでは、15歳で勤めたという少女が大した史料を持っていることはないだろう、と思っていました。しかし、山崎さんたちと一緒に小林さんの家に行きましたら、とんでもないものが渡されたわけです。これがなかったら、登戸研究所というのは永久に埋もれたままだったという風にさえ考えられます。

10. 敗戦時にどうして持ち去ることができたか

敗戦時、証拠隠滅命令が出されました。証拠隠滅命令が出たのに、なぜコトさんが史料を持っていたのか。これは不思議な事でした。

それは、端的に言うと、『雑書綴』は「自分の宝物だったから」、とコトさんは言うのです。なぜ宝物なのかというと、国の為にとあって、夜も寝ないでタイプを打ち続けて、一枚一枚上達ぶりを確かめる、自分の全力を振りしぼって頑張ったものが、この『雑書綴』でした。そのため、登戸研究所の解散の時に持ち帰りたと思った。しかし持ち帰るには、登戸研究所の門の脇に守衛さんみたいな人がおり、その人に許可されなければならない。ですが、その守衛さんもコトさんが知っていた人で、これは自分の宝物だからと話し、見逃してもらい、持ち帰る

ことができたのです。それが、戦後40年を過ぎて、私たちの手元に渡ってくる。こうした不思議な経過がこの『雑書綴』の発見にはありました。

私たちに話したあと、『多摩の流れにときを紡ぐ 近代かわさきの女たち』（ぎょうせい、1990年）という聞き書き集で小林コトさんは詳しく証言されています。参考にさせていただくと良いでしょう。

11. 登研会が出来る動きの中で

それと同時に、アンケートを取ったことは、小林コトさんだけではなく、15歳くらいで登戸研究所に勤めた大勢の仲間たちが青春を取り戻す、という流れにもつながっていきました。これが「登研会」を作っていく経過でした。登研会というのは、登戸研究所に勤めた人達の会ですが、先ほど言ったように、終戦後、登戸研究所での経験は墓場まで持って行こうというところで解散し、誰も口を開かずに40年間を過ごしました。それが、皆さんだんだん苦しく感じられるようになっていきました。昭和が終わる直前の1988（昭和63）年10月、昭和天皇が下血した時です。ですから今も残っているあの碑は、昭和63年10月に建てたと書いていますが、実際は1989（平成元）年に建てられました。

12. 碑に読まれた内容を読み解く

この碑には、裏面に非常に不思議な句が書かれています。「すぎし日は この丘にたち めぐり逢う」。この意味が非常にわかりにくい。大体わかるのは、「すぎし日は」というのはここに勤めていた日々、「この丘にたち」というのは、戦後40年経って、1988（昭和63）年になりこの丘にまた立って、「めぐり逢う」ということです。1998（平成11）年頃から元勤務員以外では私だけが登研会参加することを許されて、いろいろと話を聞くことが出来るようになりました。その時に、この句の意味を聞きました。「非常に不思議でわかりませんが、どういう意味でしょうか」と。「『すぎし日は』というのはここに勤めた時」。「ここ〔登戸研究所〕はどうでしたか？」と聞くと、不思議な事を皆さん言われました。「戦争中といえども、すごく良い場所だった」と。「何が良い場所だったか」と聞くと、「給料がなにしろ良かった。それから条件が良かった。」午後4時位に帰って良い。家に帰るのではないです。いろいろな資格を取ってこい、という意味です。小林コトさんの場合には、タイピストの資格をとるために、登戸研究所が金を出して、タイプの技術を学び、そしてその資格を取る、ということになりま

した。他の人も、例えば電気関係の人は電気技師、機械関係は機械技師を目指して専門学校、あるいは夜間の大学などにも通う事が許されます。面白いのは、英語が敵性用語といわれて勉強ができない時代、ここでは洋書を読めないと務まらない。そのため、英語の学校、あるいはドイツ語の学校などに通う人もいました。ですから戦後は英語の先生になったという人もいます。そういう意味では、戦争というので悲惨だった、というだけではなく、戦後、とても役立つような面もあったことも事実です。しかし、自分の部署以外に行き来してはならないとか、ここでやったことを家族に話してはならないだとか、それはそれは厳しかった。食事も、炊事場から自分の部署に持ってきてそこで食べる、というような習慣だった様です。ただし、将校も、ここは軍隊といっても優しく、部下をいろいろな所に遊びに連れて行った。これも小林コトさんがいっぱい証言してくれたことでした。ですから、大変不思議な世界だという事が分かります。登戸研究所は空襲も受けませんでした。そういう意味でも不思議な場所でした。

しかし、解散の時に、ここでやったことは一切口外しない、墓場まで持って行こうということで、証拠隠滅を徹底してから解散しました。ですから長い間、元勤務員の皆さんは黙り込んでいた。これが40年間続きました。しかし、昭和が終わる頃から、そろそろ自分たちの青春を取り戻して、あの時何があったか、というのを互いに話してもよいかな、と集まるようになりました。ですから、弥心神社の所にある「登戸研究所跡碑」は、登戸研究所関係者が私たちに口を開いて、残っている少ない資料を提供してくれて、そして現在の資料館につながっていく前提になりました。そのため、あの碑は極めて大事な、戦争を語り継ぐことを伝える碑だという事を、ぜひ知っておいていただきたいと思います。

これが登戸研究所跡碑です。その後ろに、あの句が読まれています。「すぎし日は この丘にたち めぐり逢う」。「見ざる聞かざる言わざる」の世界で働いた人たちが、そろそろ見てもよいかな、話してもよいかな、聞いてもよいかな、と気持ちを転換するきっかけとなるものがこの碑なのです。



図4 登戸研究所跡碑

(写真：渡辺賢二氏提供，イラスト引用：登戸研究所保存の会編『秘密にされた登戸研究所ってどんなところ？』（てらいんく，2014年）p.21，35より）

13. 登研会と少女の遺した「綴」の価値

それで登戸研究所に勤めた少女の綴りの価値ということに、次に話を進めたいと思います。登戸研究所は秘匿されていました。大体、登戸研究所という名前はそもそもありません。陸軍の研究所と言うのは、第一技術研究所、第二技術研究所というように通し番号が付けられました。九番目に出来た登戸研究所の正式名称は「第九技術研究所」でした。しかし、その第九技術研究所の名前は使ってはいけない。そのため法規からも消されました。不思議な事です。陸軍の「技術研究所令」というのがあります。「第一条 第一研究所」、これはこういうことをする、「第二条 第二研究所」、これはこういうことをする、と、このように通し番号が書かれています。では、「第九条」に何が書いてあるのかというと、「第十研究所」とあり、第九、は抹殺されています。それほど秘匿が徹底されていました。そういう研究所はどう名乗るかということ、秘密研究所とはいえないため、略称で呼ばなくてはならないのです。その時に、陸軍の中で考え出したのは、最寄りの駅名を名乗るという方法でした。小田急線の現在の向ヶ丘遊園駅は当時、稲田登戸駅といい、登戸駅は稲田多摩川駅といいました。新宿から稲田登戸までは急行が来ていました。ですから新宿にある陸軍科学研究所（登戸研究所初期の上部組織）と近いとのことでこの場所が選ばれ、そして通勤のために勤務員は登戸駅で降りていくため、登戸研究所と呼びました。また、この登戸研究所という秘密研究所にとってメダルの裏表のような関係の機関が、中野駅で降りる学校、陸軍中野学校でした。このように、駅名で名乗るのは特別で、歴史から史料を絶対に全部消す、という性質のものでした。そのため、登戸研究所という俗称で皆が呼ぶ様になっていきました。

したがって、登戸研究所に勤めた人たちは、本来の軍隊の仕事として考えられないような秘密に関わるので、小林コトさんが持っていた『雑書綴』というのは、戦後とても大きな役割を果たします。第二科のこの綴に自分の名前があれば、これは登戸研究所に勤めたという証明になり、そして登戸研究所は第九研究所のことであると戦後にわかってくると、これでその分の年金がもらえるようになります。ですから登戸研究所に勤めたことの証明として、大変大きな活用用途も出て来るのです。したがって、登研会ができると、所員が在籍実績を認めると、雇員・工員などの勤務員も認定されて、軍人恩給なんかも出て来る。こんなことで、登研会に入った人たちが、私たちにも少しずつ話をしてくれる様になりました。こうした経緯で、少しずつ証言が積み重なって、大変大きなまとまりとなっていきました。

14. 登戸研究所第二科とは？

1989（平成元）年に、『雑書綴』がでてきて、私たちはそれを山崎さんたちと一緒に本にまとめました。これが、川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた』（教育史料出版会、1989年）という本です。この本の名前も非常に重要なのですが、つまり「自分の街から戦争が見える時に、本当の戦争が見えて来るんだよ。みんな隠そうと思っているのが、みんな明らかにしようという状況になってくるのだ」という意味です。その本をまとめた時に、小林コトさんからこの『雑書綴』が渡されます。この本の中にも、小林さんが、これは本当に自分の宝物だった、と語ってくれたことを書いています。「この大事なものを、焼こうと思った事も少しはあったけども、大事にしまい続けて40年間。そして、「登研会」ができる、という経緯の中で、やはり『雑書綴』の存在を皆さんに知らせて、そしてこの中から分かってくることを、ぜひ勉強してほしい。また、登戸研究所とは何かということを、明らかにして欲しい。」そのような思いで、私たちにバトンの様に引き渡してくれました。当時、朝日新聞に書評が掲載されました。朝日新聞だけではなくて全ての全国紙に載りました。外国の新聞にも載りました。こうして、登戸研究所がマスコミに随分知られるようになっていく第一段階。これが、『雑書綴』からわかってくる歴史だったと言えます。

この『雑書綴』とは何か、ということ、またお話ししたいと思います。これは先程来言っているように、タイピストである小林（旧姓 関）コトさんが残したものです。コトさんが勤めていた第二科がどういう所だったかということ、1937（昭和12）年に陸軍科学研究所の実験場になったことで、この場所の登戸研究所の歴史が始まります。それが1939（昭和14）年に陸軍科学研究所登戸出張所となって、さらに拡大して。1941（昭和16）年には第一科、物理的な兵器（怪力光線、風船爆弾）。第二科、小林コトさんが所属していた科です、生物化学兵器（細菌兵器、毒ガスも含む）、秘密兵器が中心です。第三科は、印刷というけれども、偽札の印刷。このように一挙に拡大して、陸軍の最大の秘密研究所になっていきます。そして1942年には第四科、兵器の製造工場が、今、生田中学校がある所にできて全体が完成して行きました。第九技術研究所というのが正確な名前ですが、それがあらゆる法規からも消されています。そして、私たちが防衛省に行きますと、この第九技術研究所についてなんと記述しているか。「秘密研究所なので、資料はない。」公然と書いてあります。でも『雑書綴』以外にも、実は登戸研究所資料館には、予算を請求する時の資料があります。その資料、「状況申告」というのを陸軍の上層部に出すことがあるわけです。そうした資料は、本来なら全部永久保存で登戸研究所以外のものなどは、防衛省はみんな保存しています。けれども、第九研究所は無いと言っています。しかしそんなはずはないということで、私たちが色々探し出そうと努力したら、二十数年前に古書店の店主と友達であった関係で、その古書店から「第九技術研究所の『状況申

告』と予算請求書が売りに出ています、買いますか？」と連絡があつて、「それは当然買います。それで、いくらですか？」「薄っぺらいので本物かもわかりません」「それでも買います」「15万円です」。私は大して金がない時代にそれを買ったのです。しかしそれが、今は資料館にある唯一の基本資料と言っても過言ではないと思います。「状況申告」という資料の中に、登戸研究所が、1943（昭和18）年に675万円予算を要求しているということが書かれています。すごいです。他の研究所は200万円台であるのに、三倍ぐらいの予算がバツと出るのです。しかも「状況申告」が薄いことには理由がありまして、この研究所は秘密なので何を研究しているかは言えない、と書いてあります。ですが、金額だけはものすごい多額を満額で支給される。これが戦争、秘密戦の研究をする時の状況です。だから史料として残すわけにはいかない、というのが国家的な考えであったことが明らかです。しかし、そうした資料は存在したに違いありません。なければ、研究所に金が出てこないのですから。史料として世に出ないのは、そういうことを隠している、消している、ということです。ですから、私たちは隠された資料を探し出す手段はあるのだということがわかりました。

15. 「雑書綴」に書かれていた内容

『雑書綴』が書かれた時期がいつかということ、1941（昭和16）年から1944（昭和19）年です。先程も言いましたように、この中に極秘の判が押されているものは全くありません。しかし、『雑書綴』からは色々なことがわかってきました。

ここから少し具体的な内容をお話します。私が小林コトさんから提供された九百何枚もの『雑書綴』を預かって、山崎さんたちと分析しました。その時にどの様な手順で分析するのかと

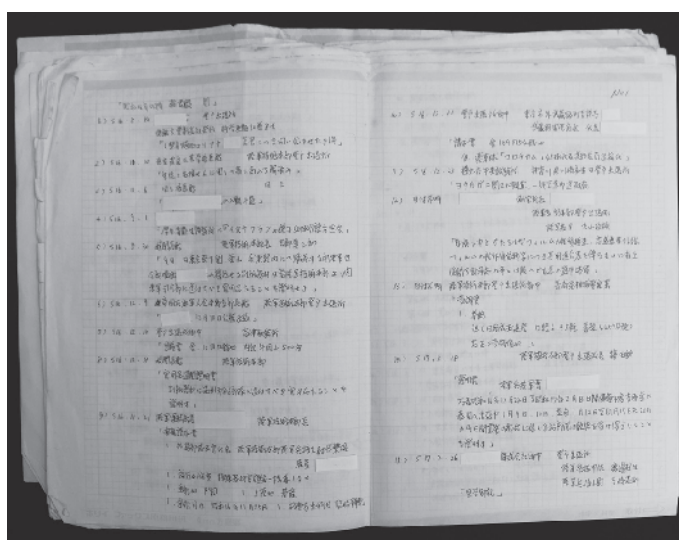


図5 渡辺賢二氏が『雑書綴』の内容を書き起こした手書きのメモ（登戸研究所資料館所蔵）

将校級を除く関係者名は伏せている（以降同様）。

いうと、今の様にスキャナーでバーっと写すような技術はありませんでした。やっと印刷が謄写版からファックス印刷に変わった段階でした。ご存知の方も多いかもしれませんが、ファックス印刷はファックス用紙みたいなものにいちいち書かなくてははいけません。この九百何点の綴りをです。

これは私が手書きしたものです。『雑書綴』の一枚目は何が書いて、二枚目は何が書いてある。これを手書きでやらなくてはならなりません。大変でした。これが何枚あるかという12枚もある訳です。これを書くのに一週間ぐらい、結構かかったと思います。それで、中原の平和教育学級で、ここから何が分かるかを分析する。そうした苦労があったため、今とはまた違った大変な努力が必要だったと思います。私も若くなければできなかったと心から思う次第です。

16. 雑書綴が示す登戸研究所第二科

(1) 購入伝票に見る毒物研究（第二班）

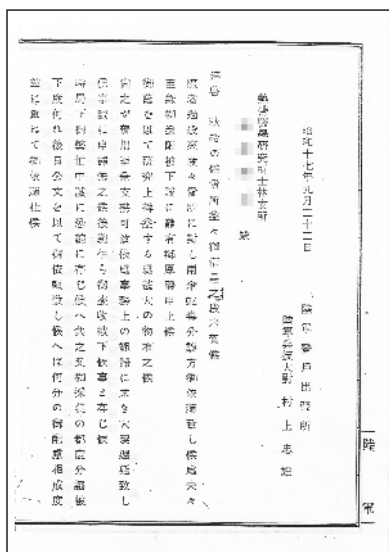


図6 『雑書綴』（複写）p.322
(小林郁久氏原本所蔵，以降同様)

『雑書綴』に綴られている書類にどんな事が書かれているか少し進めたいと思います。この購入伝票からわかるのが毒物研究、これは第二班の研究です。マリアナ、コロチカム、イヌサフラン、それからアマガサヘビの毒。これらがいっぱい出て来ます。毒を結構研究していたのだと思いました。この研究をしていたのは第二班で、班長は村上忠雄さんという人でした。この文書には、台湾の士林という所にある研究所宛に、アマガサヘビの毒を採ったらすぐに送れ、などという書類があります。この毒ヘビ、アマガサヘビというヘビの毒ですね。これは何だろうか、聞いたこともない。それで調べてみると、コブラ科のアマガサ毒ヘビというもので、台湾より南に生息していて、これに齧られると三步で死んでしまう。

そのため、あだ名を「サンボ」といいました。ハブよりも強い毒です。そのヘビを捕まえて、抜いた毒を全部登戸研究所に送れ、ということを依頼しています。あるいはマリアナ [=マリファナ] という、覚せい剤みたいなものを注文している書類などがいっぱい綴られています。ほかにもイヌサフランというユリ科の毒性のある植物やコロチカムという毒、こうしたものを扱っていたということを、これらの書類から取り出すことが出来ました。

(2) 購入伝票に見る細菌兵器研究（第六班）

そして、第六班というところが、また不思議なものを注文しています。穀物の茎をボキッと食べる^{にかめいぢゅう}二化螟虫という昆虫です。それからトウモロコシのフィソデルマ菌。小麦の種子。これらは、いわゆる枯葉剤に関するものです。この班は生物兵器としての枯葉剤を研究しているの

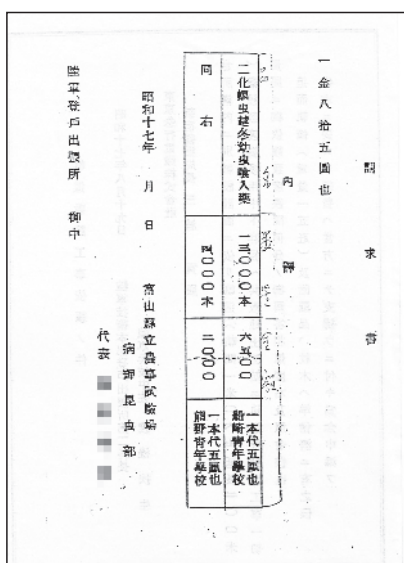


図7 『雑書綴』(複写) p.310

だとわかっていきました。小林コトさんが語ってくれた、研究所で文書をタイプすることの難しさは、英語も打ち、漢字も打ち、そしてひらがなも打ちカタカナも打つという事ですから、和文タイプというのは本当に大変だったということがわかります。これは二化螟虫という昆虫をたくさん送れと依頼している書類。小麦は麦を枯らす菌の研究のために購入されました。こうした、菌の培養や菌を作るための書類もたくさん綴られています。

(3) 購入伝票から見る不思議な購入物 (第二班・第三班)

[illegible]

図8 『雑書綴』(複写) p.592

そのほかにも第二科の購入伝票には不思議な購入物がありました。これは第二班や第三班のことで、氷を大量に購入しています。1942（昭和17）年10月27日、1943（昭和18）年3月2日。冬なんかも大量の氷を用意しています。今資料館がある場所がこれらの班の使用した中心的な研究室ですけども、ここには冷凍庫なんかも勿論あります。それでも足りないほどのものを冷やさなくてはならない。何をかという、またあとでお話する青酸ニトリールという特殊な毒物です。これは冷やさないとすぐに揮発してしまうものでした。また、豚肉、あるいは牛肉も大量に購入しています。これにも細菌をつけて、何とかしようという研

究になります。氷の購入伝票をもう一度見てみましょう。7月にこんな氷を買っているのは、当たり前と言えば当たり前、しかし、冬でもたくさん買っています。そういう書類がたくさん出てきます。

(4) 危険作業に従事した事実

危険作業に従事したらどうするのかということがわかるものとして、危険手当や「危険作業従事現況調べ」とか、あるいは救急治療についてなどという書類がたくさんあります。例えば、青酸を飲み込んだりした場合にはこういう処置が必要になる、それからホスゲンガス、一酸化炭素、ミドリ剤など、いろいろなものを吸いこむなどした場合に、緊急に処置する方法を示し

た資料が出てきます。ということは、そのような危険物を扱う研究をたくさんやっていたということです。アルカロイド、あるいは麻酔剤、そのほか色々なものです。そのため、研究に間違いがあって、胃を洗浄しなくてはいけないなど、そうした危険なものをたくさん扱っていたことがこの資料から裏付けられます。

[illegible]

図9 『雑書綴』(複写) pp.666-668

(5) 出張文書

登戸研究所第二科の人が、出張で何度も方々に出ています。これは様々な細菌兵器や毒ガス兵器、風船爆弾に付ける兵器など、色々な目的で出張していることの現れですが、今でもこのホニ号とかホホ号とかホヘ号とかホロ号とかというのはまだよく分析されていません。しかし、例えばこのホニ号の資料を見ると、北海道に行って軍用犬を研究しているということがわかります。今では、軍用犬を研究するというのが何かというのはわかってきています。中野学校出身の特務機関員が恐れるのは、諜報活動の際に敵の軍用犬に吠えられることでした。忍者

[illegible]

図 10 『雑書綴』(複写) pp.816,817

が弓矢や刀を恐れないことと同じで、特務機関員は相手の国の鉄砲や大砲を恐れるわけではないのです。しかし、犬にワンワンと吠えられることを恐れたのです。ですから、のちに登戸研究所の人たちが語ってくれましたが、スパイ活動などを行おうとして中野学校出身の人が敵地に潜り込む時に、大人数でワッと行くではありません。彼らが潜り込もうとする時に一番恐れたことが、軍用犬に吠えられること。そのため、軍用犬が吠えない薬を発明してくれという注文が登戸研究所にいっぱい来ます。それで、犬が良い気持ちになって追跡ができないよう

にするものは何かを検討するために、忍者が取った方法を研究しました。忍者はミミズをカラカラに干したものを撒いていたらしいのです。そのため、ミミズに何か特殊な物質が含まれるのではないか、とミミズを研究し、ミミズから特殊なものを抽出して、それに薬を交ぜたり、噴霧したり、エサにしたりと色々な工夫をしました。それで登戸で作ったものを、篠田籙所長も同行して、満洲などで実験したりしました。そうしたら、優秀な軍用犬でも吠えない「え号剤」という、犬が「悦に入る」ものを発明できました。猫にマタタビみたいなものです。この薬剤のものすごい数の注文が敵地に行っている人たちから寄せられ、命が助かった、というような話になっていくわけです。こうしたものも秘密兵器として研究していたということが『雑書綴』からわかります。

(6) 動物実験室設置

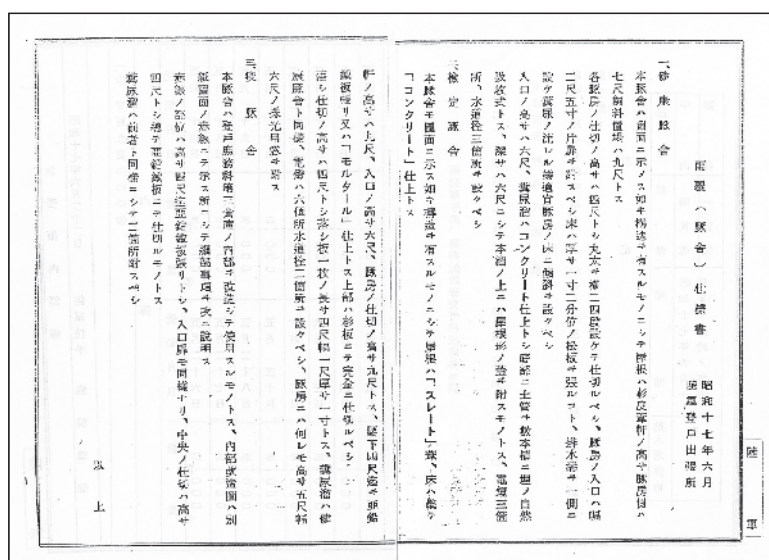


図 11 『雑書綴』(複写) pp.286,287

この書類は動物実験室が置かれていたことを書いています。特に、豚の動物実験をたくさん行いました。豚は、どうも人間に近い。皮膚の様子も人間に近くて、毒ガスをあてるとただれとか、あるいは、例えば毒物を注射するとどういう反応をするか、などというのも、豚で実験すれば人間での効果が想像できるだ

ろうと、たくさんの豚が実験に使われたようです。豚の疫病に罹った豚用の豚舎などが整備されていることが、この資料からもわかります。

(7) 第二科の所員の出身学校

私たちの活動のなかで、たくさんの登戸研究所の関係者から話を聞けるようになったきっかけとして、所員の出身学校一覧表があります。この資料には、登戸研究所の所員と呼ばれる、今で言う大学出の幹部所員の名前と出身大学などが書いてあります。入所した順番で載っていて、最初の方が伴繁雄さんです。続いて毒物研究の村上忠雄さんなどがでてきます。私たちの活動もこの近くで働いていた人たちだけではなく、この名簿を手掛かりに、こういう学校を出たこの人はどういう人か、この元所員に話を聞けないか、話を聞ける人は聞きに行こう、と近隣在住以外の元所員への聞き取りができるようになりました。この小林コトさんが残して

れた『雑書綴』の中の所員一覧のおかげで私たちの活動が大いに発展しました。『雑書綴』は、登戸研究所の全体像や、どういふことをやっていたのかを全面的に理解する土台となる資料であったと言っても過言ではありません。

図 12 『雑書綴』(複写) p.617

(8) 中支那防疫給水部との関わり

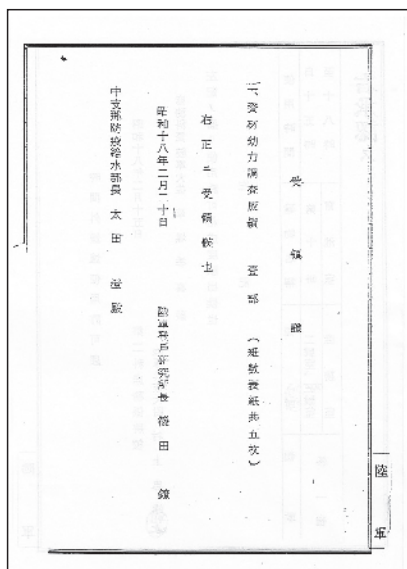


図 13 『雑書綴』(複写) p.456

731 部隊〔註・正式名称 関東軍防疫給水部〕と同じような組織である中支那防疫給水部の南京付近の本部に、実績報告書の受領証があります。これはあとでわかる事ですが、登戸研究所の中では人体実験ができません。そのため、細菌兵器であるとか毒物などの兵器を研究した場合には、それを実証するための人体実験は中国で行われました。この資料は 1943 (昭和 18) 年 2 月のものですが、昭和 18 年 1 月に実験した、その報告書の受領証だと考えられます。

(9) 研究途上の事故

ホニ号の研究途上で事故を起こして、吸い込んで肺がやられた、という記録です。また、登戸研究所では死亡者も出す事故も起きました。死亡者が出たときには弥心神社の前で慰霊祭も行われました。このようなことも小林コトさんはお話をしてくれました。

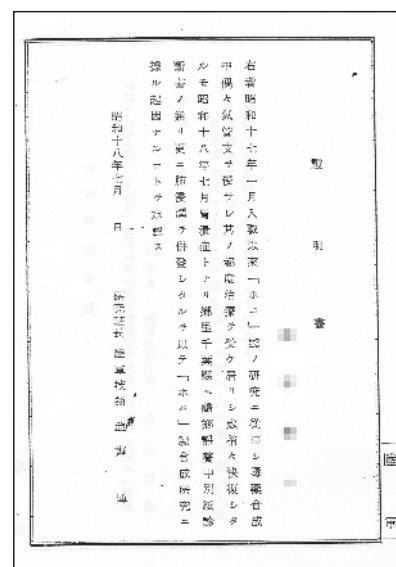


図 14 『雑書綴』(複写) p.585

(10) 科内巡視所見

山田桜さんという人が、1943（昭和18）年頃から第二科長に着任します。巡検として見て回ると、とんでもなくずさんな管理をしているなどと、とても憤っている文書があります。ですから、登戸研究所内ではこの山田桜さんというのはあまり評判が良くなかったという話も、私たちは聞く事ができました。

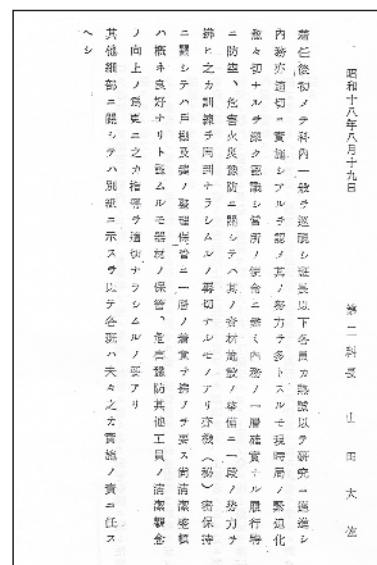


図15 『雑書綴』（複写）p.660

このような経過の中で、私たちは『雑書綴』を媒介して、活動の第一段階として『私の街から戦争が見えた』という本をまとめることができました。それまでは何も見えなかった登戸研究所の世界が少し見えてきたことになります。陸軍登戸研究所第二科がやったことがらは、この本にほかにも資料が収録されていますのでそちらを見ていただきたいと思います。

おわりに

第二科の開発した生物化学兵器はこの『雑書綴』から明らかになりました。その過程では川崎市民や高校生の取り組みが果たした役割は決定的でした。なによりも、小林コトさんというタイピストとして登戸研究所に勤務した人が、そのきっかけとして資料を提供してくれました。『雑書綴』が無かったら、こうした資料館も出来なかったし、登戸研究所の実態は眠ったままであったでしょう。そのような不思議な状況を解明したのが、この『雑書綴』でした。

ここからは、のちに所員の発言を踏まえてわかった、登戸研究所第二科がどんなことを具体的にやったかという全体像をまとめていきます。

この中で第一班長であった伴繁雄さんという人はかなり重要な役割を果たします。『雑書綴』にたくさん名前が出てくるこの伴さんは、登戸研究所が出来た時からの中心人物でした。南京で2回人体実験をやりましたが、その時の立ち合い人をした人です。ですから、二科だけではなく登戸研究所の全体像を知る大変重要な人物です。『私の街から戦争が見えた』を出版した時に、伴さんに、この本を届けるのに併せて、『雑書綴』を携えて話を聞こうとしましたが、当時は「一際話すことは無い」と凄い剣幕で断われました。「何も話すことは無い」。何故そ

う言われたのかはあとでわかりました。ちょうど帝銀事件の犯人として捕まり、死刑囚として牢獄にいた平沢貞通さんが死亡するという事件が起きたのです。その時に、平沢氏は犯罪者ではなく、実際の犯行には登戸研究所の毒物が使われたのではないか、ということが言われ始めていました。それを伴さんが心配して、もう話すことは無い、と頑強に拒否したというのがあとにわかってきます。そして、長野県駒ヶ根市の高校生や法政二高生が交流して、伴さんなどは、私たち大人には話さないが高校生には話そうと、次第に口を開いてくれるようになりました。その結果、伴さんが色々な形で私たちに情報を寄せてくれて、小林コトさんの資料調査が更に深まるのは1989（平成元）年以降の話です。1989年、そして1990（平成2）年。高校生に話をした伴さんを中心に、元登戸研究所勤務員の自分達も後世に資料を残そう、ただ高校生に語るだけではダメだと仲間呼びかけて、第二科だけでなく、第一科、第三科についても後世の記憶に残していこう、という取り組みをやっていきます。伴さんは1990年から1993（平成5）年位まで、原稿用紙で800枚位の原稿を必死に書き、その原稿を書き上げた1993年に亡くなります。ですからその末期、色々な記録を残してくれた人でした。ほかにも、資料館でも一部使用している、第二科が開発した兵器の図解パネルなどは、もとは伴さんがあるテレビ局に協力してできたものです。伴さんは第二科第一班という所で、科学的な秘密兵器をたくさん開発したので、こうした形で資料を残しました。伴さんは遊撃部隊用兵器、秘密作戦用兵器、その他何でもやっていた第二科の中心的な人でした。

第二班長は村上忠雄さんという人で、先ほどお話しした「え号剤」は軍用犬が追いかけられないようにする薬剤、あるいは雑書綴にもたくさん出てくる、注射で刺すと3歩も歩かない内に死んでしまうというアマガサ蛇の毒。こうした毒物を研究した人です。

第三班長は土方博さん、この人はなかなか私たちに語ってくれないまま亡くなりました。毒ガス兵器、青酸ニトリールという大変な得体の知れない毒物を研究し、兵器化して、それを中国で1941（昭和16）年と43（昭和18）年に人体実験した中心的な人物の一人です。

第四班は黒田朝太郎さんという軍医さんが班長で、豚をよく利用していました。毒物実験を登戸研究所で繰り返していました。

第五班長は丸山政雄さん、この人は特別の秘密兵器、秘密カメラとかコピー機など、色々なことをやっていました。丸山さんのもとで働いていた細川陽一郎さんも、伴さんの紹介で私たちに色々話をしてくれるようになった人です。

第六班、ここはあとで班長になった池田義夫さんという人がいます。この人が着任する前は、アメリカ向けの、小麦を枯らす、トウモロコシを枯らす、馬鈴薯を枯らす、といった枯葉剤の研究をしていましたが、兵器化できずにいました。池田さんが班長になってからは中国の生物細菌兵器、二化螟虫と小粒核病菌による枯葉剤作戦を大々的に行ったという証言がでました。これは伴さんを通して紹介してもらった、元班員の松川仁さんという人が、克明に私たちに語っ

てくれるようになったためです。そのおかげで実態が今は明らかになりました。登戸研究所資料館には、この松川さんが書いた資料もあります。

それから、最後にできた第七班ですが、ここでは、1943（昭和18）年、アメリカ人がもっとも多く食べるその牛を殺すことのできる、アメリカ向けの細菌兵器である牛疫ウイルスを開発しました。これは久葉昇さんというその細菌兵器の開発者本人が手記を書いています。釜山で散布実験をしたらこの牛が全部コロリと死んだので、これはいけるとなりました。アメリカ人は、牛が居なくなったら一番困ります。そのため、今の資料館の建物で、風船爆弾に搭載できるように、大量に牛を殺す牛疫ウイルスを必死に作りました。そうすれば戦争を有利にもって行くことが出来るかもしれないということだったのです。しかし実際の風船爆弾作戦では、このウイルスは打ち上げられませんでした。「徹底して爆撃する」というアメリカの何回にも渡る通告のもとで、「あるぞ!」と見せかけながらやらなかった、しかし、実際にはやろうとしていた。これは恐るべきことだと思います。この第七班と関係して、731部隊の石井四郎の片腕と言われた内藤良一もここに来て、風船爆弾につけ、人体を傷つける細菌兵器を研究していました。

登戸研究所で研究に携わった科学者が、1943（昭和18）年4月14日、陸軍技術有功賞を受賞します。これは陸軍の科学者にとって最高に名誉あるものです。この有功賞を陸軍で最初にとったのは731部隊長の石井四郎です。登戸研究所が受賞したのはここに書いてあるように篠田籟、伴繁雄など、この受賞理由は「特殊理化学資材」。しかしこれは、とんでもないことだと思うのです。この賞をもらった結果、当時の価値で1万円、今の価値で1,000万円の副賞をもらいました。そのお金で建てたのが弥心神社と動物慰霊碑です。この受賞対象となったのが、青酸ニトリールなどの毒物兵器でした。登戸研究所内では動物実験が繰り返されました。しかしそれでは受賞できません。何故なら、人体実験をしなくては証明されないからです。伴さんは、最初に1941（昭和16）年に人体実験をした事を「最初は嫌であったが段々趣味になった」と答えています。恐るべき証言です。しかし正直な証言です。国のために作っているという想いになっていくわけです。軍事を優先する科学者が陥った最大の問題がここにありました。伴さんは亡くなる直前に、この人体実験をした事を自ら認め、たとえ戦争中といえども自分は捕虜を人体実験してしまった「申し訳ない、冥福を祈る」と謝罪の気持ちをきちんと自分の言葉で書きます。その時に奥さんに向かって、「お前にも長い間すまなかったな」と謝ったというのです。登戸研究所を秘密にしないで、本当に世に出して良かったと私も思います。

今日は小林コトさんのご家族の皆さんも来ていただいています。伴さんの息子さんをはじめ、お孫さん、ひ孫さんなども登戸研究所資料館に何回か来ていただいています。そして今では、ひ孫さんは明治大学で勉強しています。登戸研究所でやったことが、今度は今の社会の中で平和にどのように活用されていったらいいのか。資料館がそうした人間の生き方を学んでい

く非常に重要な場所としていけばいいなと思っている次第です。

丁度時間になりましたので、私のお話を終わらせて頂きます。どうもありがとうございます。

質疑応答

〔質問1〕私の父が大正10年位の生まれで終戦時に25歳位でした。それで私の子どもの頃でよく覚えてないのですが、陸軍の指令を受けて、当時満州で兵隊さんとして妻も国境にいました。もう敗戦がかなりわかっていて、部隊が南方に送られたりとか、満州はソ連の侵入で全滅しました。その何年前に、父と、あと何人か技術者と思われる人が、憲兵に護送されて秘密裡に日本に連れて来られました。その時も、どうも兄が聞いた話では日本電気の研究所で電探かレーダーかテレビみたいなものの研究のお手伝いをしていた、今だと電気工学科の下働きとして働いたという事なのですが、それが何かこの登戸研究所とも関係するような気もしたのです。けれども、日本電気も確かこの近くにあったと聞いております。ちょっとそのあたりも何かわかりましたら教えてください。

〔渡辺〕日本電気電波研究所というのが、この谷を越えた、今専修大学のある所にありました。それが、登戸研究所でいうと第一科ととても密接な研究関係にあって、く号兵器、怪力光線や電波関係の研究などをしていました。日本電気の研究所は電波兵器の研究をしていて、この高さの場所が電波兵器研究にいいぞ、と陸軍科学研究所に紹介して、登戸研究所がここに来たという経緯があります。ですから、十分、日本電気の研究所で働いていた可能性があるのではないかと思います。

〔質問2〕専修大学で“地域とメディア”という授業を担当しています。今日の先生の話が動物慰霊碑から始まったというところですので深く感銘を受けています。ただやっぱり、今日〔会場を〕見渡した感じ、せっかく明治大学で講演会をやっているのに学生さんの姿がちょっと少ないかなと思ったんですけれども、やっぱり今の10代20代の学生に、こういうことを語っていくのに、興味を引くことなどは難しく感じています。先生が何度もこのような講演会等をされていると思うのですが、今の10代20代に、どういったことを、関心を〔引くように〕持っていこうかという、何かお考えがありましたら教えてください。

〔渡辺〕なかなか難しい問題ですけれども、明治大学でも「登戸研究所から考える戦争と平和」という講座を、前期は生田キャンパスで、山田先生と私ともう一人の講師で受け持っています。それから後期は、駿河台で受け持っています。結構真面目に若い学生さんたちが参加してくれていますので、まんざら捨てたものではないです。けれども、まだまだ若い人々たちには自力で動くというのではないと思います。しかし、戦争というのはこうだった、というのではなくて、こうやったらわかってくるぞと。地域のこういう人たちから聞き取り

をしたり、いろんな方とつながっていくことの意味、こうしたことを、今の学校教育でだんだんできなくなっている。学校の先生も、忙しくて、外へ出て市民と一緒に学習したりすることができなくなっている。みんなバラバラになっている。これをどういう風にしていったらいいのか、というのが大きな課題ではないかと考えている次第です。それで、こちらの資料館にも、日本電波研究所が専修大学の場所で何をやったのかという資料がありますので、ぜひ調べていただきたいなと思います。

〔質問3〕 今日のお話、直接は関係ないかもしれませんが、1989（平成元）年という年に、川崎と長野の方で高校生がほぼ同時にこの登戸研究所の調査活動を進める。どうしてこの年、偶然だったのでしょうか。

〔渡辺〕 偶然もありますが、必然的なことと言えば、1988（昭和63）年に私たちが中原平和教育学級を仕立てて、『私たちの街から戦争が見えた』を1989年に出版しました。これは当時マスメディアにとっても評価されました。そうしたら突然、長野県の駒ヶ根市の赤穂高校平和ゼミナールの子たちが「私たちも登戸を調べている」という情報があって、交流したいという申し出がありました。それで法政二高の高校生と長野県の高校生が1989年から交流するようになった。ですから交流する前提として小林コトさんの資料『雑書綴』があって、それが世に出て、その後交流が広がって、さらに登戸研究所がなぜ本土決戦の時に長野に移転したのかということや、伴繁雄さんなども長野に行ったことがわかった。そして長野に伴さんの家があったので、長野の高校生が訪ねたら、資料を渡してくれた。そうした繋がりの中で、この登戸と長野が結ばれていった。こうした経緯になるわけです。

（ここで小林コトさんのご長男より挙手） それでは小林さんからひとつ、感想を含めて是非お話いただきたいと思います。

〔小林コトさんご長男〕 渡辺先生、どうも色々ありがとうございます。ご苦労様でした。また今日ご参加頂きました皆様、ありがとうございます。非常に詳しく説明していただきまして、また私たち遺族も知らないようなことも、今日来て初めてですね〔聞きました〕。今日の先生から当時のアンケートを出していただきまして、探していました。母が亡くなって7年が経つのですが、私どもとしまして、そのアンケートを受けて、遺族が、どうして、『雑書綴』を渡辺先生に出したのかという観点からちょっとお話ししたいと思います。アンケートを受けて、私をはじめ父を含めて家族会議を開きました。あれを見ると、非常に内容的なものが、大変な事をやっていた施設ですから、色々な立場の方がいると思いました。非難轟々する方、場合もあるでしょうし、貴重な資料だと捉える方たちもいるだろうから、どうしようかという話で、私をはじめ父と思案し色々検討しました。ですが、

渡辺先生のお人柄もあるのですけれども、母も〔登戸研究所に〕携わって非常に戦争の悲惨さというか、それも年数が経っていましたし、平和を〔願う〕ということは、非常に母には重要に思えていまして、一回戦争を起こしてしまうと止めることが出来ない。だから絶対戦争は起こしてはいけないんだということで、いろんな立場の人間が、色々非難されても何でも、やはりその資料として世に出し、活用する場を渡辺先生によって作っていただいたので、喜んで提出させてもらおうと。そしてそれをまた読んでいただいた方の判断も色々ありますけれども、平和の為に使っていただくという形で出させてもらいました。今日聞いていまして、私も、今後のいろんな平和のことについて非常に役に立っているなど。この研究所〔資料館〕を運営するような立場としてもですね、役に立たっているなど。今回も、また〔『雑書綴』の〕実物は今、私が保管しているのですけれども、〔資料館から〕その実物を展示させていただきたい、ということで実物もいいですよ、と展示させてもらって、見ていただきたい。歴史というものをみますと、この60年経って、あとで見た時に、これが本物なのかどうなのかということをやはり疑う方もいると思います。ところが、実際、どうも言っていることは本当のことだと。本物なのだと証明する意味でも、やはり貴重な資料なんだなとつくづく感じました。本当に大変なご苦労だったと思いますけれども、母も喜んでいと思います。どうもありがとうございました。

〔渡辺〕どうもありがとうございました。ご家族で本当にどうなるのだろうか心配しながら提供していただいた資料は戦争とは何かを伝える大変重要な役割を果たしています。それと関連して、共に調査をして、小林コトさんから、資料と一緒に預かった山崎さんから一言お願いします。

〔元川崎市中原市民館職員 山崎信喜氏〕：当時一緒にやった山崎でございます。市民館の職員として学級を持ちながら、実際、先生と一緒に作業をやったり、色々読み砕いたり、プライベートの時間を使いながらですね。異動で別の施設に移ってからも先生のもとに駆け付けて読む、一緒に勉強会をやったりなどしながら、作ってきたものです。小林さんのアンケートも読みましたけれど、何回も字を消したような跡があり、大分悩まれながら出したのだなと分かるようなことを今思い出しておりました。息子さんの話も大変感銘を受けました、どうもありがとうございました。

〔質問4〕昔の新京、今の中国の長春にも動物細菌。その資料の中に関係がある〔ことがわかるものがある〕かどうか訊きたいです。

〔渡辺〕場所がそこかどうか分かりませんが、二化螟虫と小粒菌核病菌は、中国の上都と桃源という所に大量に撒いたというのが資料にはあります。しかし、それ以外に登戸研究所の細菌兵器を撒いたという記録は資料にはありません、ですから、731部隊関連のものはやっ

たかもしれませんが、そこは何ともまだ証明出来ていないということになります。

〔質問5－1〕 ちょっと話が違うんですけど。戦争が終わって、みんな証拠隠滅しますよね。

で、現在、奇しくも桜を見る会で、たくさんのデータの偽造とか、証拠隠滅とか。何で日本はこういう体質なのか、というのがちょっと訊きたいと思います。

〔渡辺〕 なかなか、難しい質問です。あの当時の、登戸研究所なんかは、国家秘密として消したという気持ちもわからないこともないのですけども、今の安倍政権の証拠隠滅はどうもわからないですね。かえって名簿を出せば、偉い人、君たち呼んだんだけど、と証明されるじゃないですか。それを出さないなどというのは、ただ、後ろめたいことをしたとしか考えられないように思います。陸軍登戸研究所の秘密とはレベルが違い、証明する証拠を隠滅する、というのはとても低レベルの証拠隠滅みたいなものが行われていると思います。

〔質問5－2〕 今の桜を見る会です。ならば、まだ残っている真面目な省があるわけですよ、そのデータで来年やったらどうかと。政治家先生のホテルの前の晩のパーティーは必要ない訳です。

〔渡辺〕 わかりました。それでは時間になりましたので、最後に山田先生からお話いただきます。どうもありがとうございました。

閉会の辞 館長 山田 朗

渡辺先生ありがとうございました。このように、資料が随分経ってから出てくるということは今でもあります。今から4年前の2015年、私たちが長野県の伊那の方に調査に行った時にこういうことがありました。焼夷剤による放火用の道具を造っていた工場にかつて勤めていた方が、敗戦の時に造っていた兵器を持ち出した。そしてずっと戦後も、この兵器、この兵器というのは木の棒みたいのもので先に火を点けると、ボーっと15センチ位火が出てくるもので、おそらくゲリラ戦の為に開発したものです。それを本土決戦の為に大量生産していました。その兵器を持っているという方がいて、ハチの巣を焼くのに丁度良いと、戦後もずっと使っていて、あと残り3本になってしまいました。そこに、たまたま私たちが通りかかって、実はこんなものがある、ということで、まさに戦後70年経って、そのような秘密戦兵器の実物が出てきたということがあります。その兵器は資料館の第五展示室に展示しています。ほかにも、今年（2019年）の夏に、NHKのテレビなどでいくつか取り上げられましたけれども、ずっと隠されていたとか、個人がお持ちだった226事件の時の海軍の資料が出てきましたとか、あるいは昭和天皇の側近だった田島道治さんの日記が、それは実は存在は分かっていたのですが、より詳し

く内容が公表される。そういったことは、大体、史料をお持ちの方の代が替わって、どうしたら良いのかということで、今になって秘匿されていたものが表面に出てくることがあります。ですから私たちは、戦争の実態であるとか登戸研究所の実態の解明を諦めてはいけないと思います。一体何が突然出てくるのかわからない。現実はこの登戸研究所資料館ができた後にも、所員のご遺族の方から日記を送っていただいたことがあります。そのおかげで今まで知られていないことがまたあったとか、ということがあります。ですから、本当に歴史研究の最初のステップは、やはり史料の発掘というようなこと、あるいは現代史であれば、オーラルヒストリー、まさに聞き取り調査という様なところからです。この資料館は設置されて十年経ちますけれども、私も実は最初、この資料館の館長を引き受けたころは、「このあと仕事あるのかな」と、また、資料館を作った後は、何をやったらいいのだろうと思ったのですが、実はやればやるほど仕事が増えてくるといふ、そういう資料館です。そして、色々なことを課題としておりまして、今日まさに渡辺先生からお話しいただいたような、登戸研究所の実態の解明という、これは最大のテーマです。またこれに付随して、先生のお話の中にもありましたが、帝銀事件で使われた毒物がここで開発された物ではないかという疑いが常にありますので、帝銀事件についても昨年企画展でやりました。映画も上映しました。それで毎年、帝銀事件について企画をやる宣言しました。帝銀事件は一月に起きましたので、その時期にやると言ってしまったのです。今年はちょっと遅れますが、三月に帝銀事件の捜査内容を取り上げます。『甲斐捜査手記』というのがあります。これは、当時の警視庁捜査第一課の係長であった甲斐文助という人が残した捜査手記です。膨大な物なのですが、この分析をずっとやっておりまして、その結果を来年の三月十四日の土曜日なのですけど、その分析の結果の報告をさせていただこうと思っています〔註・新型コロナウイルス感染予防策のため延期〕。帝銀事件関係もかなり重要な課題ですので、今後とも弁護団の方から色々情報のご提供もあるかもしれません。せっかく皆さんもお集りの場ですので、公約実現というのが、来年三月十四日にはそういった企画もやりたいと思っています。これからも毎年の企画展はやっていきます。もうこれで十回目ということは、ちょうど来年の三月でこの資料館も十周年ということになります。さらにこの後も続けていくために研究を深めていきたいと思っています。そのためには、本当に皆様のご協力も必要です。登戸研究所資料館をさらに多くの方にご覧いただき、いろんなご意見をいただきたいと思っています。何卒今後ともよろしく願いいたします。今日はどうも、ありがとうございました。

〔追記〕

本稿は、2019年12月7日（土）に明治大学生田キャンパス中央校舎メディアホールにて開催された第10回企画展記念講演会「少女が残した登戸研究所の記録・『雑書綴』発見秘話」書き起こしに加筆・修正したものです。